

1. 教育の責任

「現代社会の諸問題を発見・理解できる基礎力を備え、社会で活躍できる人材の養成を目指す」という現代社会学部の教育目的に沿い、国際社会において特に重要となる「教養力」および「思考力」の育成を重視した授業を行っている。学生が在学中に身につけた知識や視点を、卒業後に社会のさまざまな場面で主体的に発揮できるよう、各科目において目的意識を明確にした教育を実践している。

【担当科目】

〈学部〉

- ・学びの道しるべ A・B（必修科目、通年、4 単位）
- ・中国語 I・II（通年、2 単位）
- ・中国語演習 I・II（通年、4 単位）
- ・まちづくり研究の方法（春学期、2 単位）
- ・アジアの都市づくり（地誌学）（春学期、2 単位）
- ・世界の食文化（秋学期、2 単位）
- ・多文化共生メジャーのゼミナール I・II（演習、通年、4 単位）

〈大学院〉

- ・比較文化特別研究 I・II [研究指導]（演習、通年、4 単位）
- ・ジャパノロジー研究（講義、春学期、2 単位）
- ・日本・東洋文化特論（講義、春学期、2 単位）

2. 教育の理念

「豊かな教養と専門的学術、旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材を育成する」という本学の教育目的に沿い、異文化を尊重し、国際化が進む社会において主体的に知的共生を実践できる人材の育成を教育理念としている。具体的には、語学および「都市」「食文化」を切り口とした授業を通して、アジア諸地域の歴史や伝統文化、社会的背景について学ばせることで、異文化理解を基盤とした教養力と、現代社会の課題を主体的に考察・解決する思考力を身につけ、社会で実践的に活用できる人材の育成を目指す。

3. 教育の方法

語学科目では、学生にとって理解しやすい授業を重視し、課題（宿題）の確認、宿題カードや小テストの実施と添削・返却を通じて、学生一人ひとりの理解度を把握し、継続的な学習意欲の向上を図っている。中国語の発音や基本的なあいさつ表現については、繰り返しの発声練習と板書・ノート指導を組み合わせ、復習しやすい学習環境を整えている。また、授業ごとに新しい語彙を取り入れ、言語を実社会と結びつけて学べるよう工夫している。

地理学関連科目では、専門知識の習得に偏らず、アジア地域の衣食住や歴史・文化に視野を広げ、国際社会で活用できる知識の修得を重視している。自身の調査に基づく資料を用いた授業や、学生主体の発表・ディスカッションを通じて、プレゼンテーション能力やコミュニケーション力の育成を図っている。

「学びの道しるべ」では、1 年次学生との対話を重視し、学修面だけでなく生活や進路に関する相談にも対応することで、学生が安心して学べる環境づくりに努めている。「多文化共生メジャーのゼミナール I・II」では、学生の関心を尊重した研究指導を行い、主体的に学び続ける姿勢と基礎的な問題解決能力の育成を図っている。

大学院においては、「比較文化特別研究 I・II（研究指導）」を中心に、研究テーマ設定から論文執筆まで一貫した指導を行っている。

4. 教育の成果

授業アンケートの結果から、定量的評価においては、各項目が本学の平均値と同等、もしくはやや上回る水準で推移しており、履修者から概ね高い評価を得ている。特に授業運営や内容に関して大きな不満は見られず、一定の教育効果が確認できる。

また、授業アンケートに加え、「自由記述」欄には、授業改善につながる意見については積極的に授業内容や方法に反映している。学生からは、「日本以外のさまざまな国の文化や歴史について知ることができた」「多様な地域について学び、さらに深く考えたいと思った」といった感想が多く寄せられており、授業で掲げた学修目標は概ね達成されていると考えている。

さらに、国際交流センター主催のスピーチ大会においては、指導した学生のうち 3 名が中国語によるスピーチを披露し、日頃の学修成果を発表する機会となった。これは、語学科目における継続的な学習と実践的指導の成果の一例であると捉えている。

5. 改善への努力と今後の目標

現在、改善すべき課題として重視しているのは、授業で扱った教育内容をいかに学生一人ひとりに定着させ、継続的な学びへとつなげていくかという点である。そのため、授業内での理解度確認や小テスト、ミニレポートなどを通じて、学生の理解状況を把握するとともに、必要に応じて授業内容や進め方を調整するよう努めている。

今後は、学生が学修内容を振り返り、自らの言葉で整理・表現する機会をより多く設けることで、知識の定着と理解の深化を図りたいと考えている。

【添付資料】